

「国際日本研究の発展

一言語・文学・歴史・教育」

第1回～第4回は17:45～19:15

第5回は15:30～18:30で実施

▶Zoom上での【オンライン開催】です。

▶【入場】無料、事前申し込み必須

01

日本語学
ニホンゴガク

7月30日(金)

受身・可能・
自発・再帰・自動

- 古代日本語とスペイン語の
対照からみえてくること -

志波彩子氏
(名古屋大学)

▼オンライン▼

02

日本文学
ニホンブンガク

10月14日(木)

私の見た文豪たち

- 三島・川端・谷崎夫人 -

語り手 Paul McCarthy氏
(日本文学翻訳家・駿河台大学名誉教授)

聞き手 西原大輔 (本学)

▼オンライン▼

03

日本語学
ニホンゴガク

11月5日(金)

言葉で心を理解する

～英語に敬語が無いって本当?～

車田千種氏
(ロチェスター大学)

▼オンライン▼

日本語教育
ニホンゴキョウイク

2022年

1月7日(金)

メトロリンガリズムと
アイデンティティ

- ことば、人、場、社会の複合性と
アイデンティティを見据えた
ことばの教育 -

尾辻恵美氏
(シドニー工科大学)

▼オンライン▼

04

日本社会研究
ニホンシャカイケンキョウ

2月4日(金)

国際日本学研究院 ワークショップ:

巨大伝統都市の比較史

- 近世日本とオスマン朝の
都市内地域社会をめぐって -

[報告] 守田まどか氏
(本学アジア・アフリカ言語文化研究所・特別研究員)

ジョン・ポーター (本学)
呉偉華氏 (大阪市立大学・博士研究員)
小美濃彰氏 (本学・博士後期課程)

[司会] 池田真歩氏
(北海道学園大学)

▼オンライン▼

05

2021 年度 連続講演会「国際日本研究の発展 - 言語・文学・歴史・教育 -」第 1 回

受身・可能・自発・再帰・自動

- 古代日本語とスペイン語の対照からみえてくること -

講演者：志波彩子氏（名古屋大学）

日時：2021 年 7 月 30 日（金）17:45 - 19:15 オンライン開催

これまで現代日本語の受身文について数々の論文を著して高い評価を得ている志波彩子氏による講演であり、スペイン語の受身と古代日本語の受身を比較するという意欲的な内容であった。これまでの氏の研究は主に、テキストジャンルと構文の関係を背景にしてどのような受身文のタイプがあるのかを精緻に記述することが中心となっていた。そこで得た深い洞察を元にしつつも、中動態というヴォイス現象を持つ印欧語の代表例としてのスペイン語と比較することによって、日本語のラルルの用法の拡張（受身・可能・自発・尊敬）や、日本語の固有の受身文にみられる制限（有情物主語の文に偏る）の原理を説明するのに効果的な視点をもたらしたと言える。なお、氏が今回の発表において古代日本語のラルル構文を取り上げているのは、現在の日本語の受身文は明治期に欧文翻訳の影響を受けて大きく変化しているためであり、日本固有の受身文と比較しようという意図による。

現在でも外語大の YouTube チャンネルで氏の講演は視聴可能であり、詳しくはそちらを参照されたいが、誤解を恐れずに概要を述べれば、古代日本語のラルル文はもともと「自然発生 spontaneous」を表す自動詞構文として用いられた。この「自然発生」の意味を継承しつつ、動作主が必須になる事態にその捉え方を拡張する際、動作主に視点をあてた自発・可能構文、そして被動者に視点をあてた受身構文へと用法が広がっていった。一方、スペイン語の *se* も自然発生の意味を持つ非対格構文を持つが、そこからの拡張は中立視点の構文が中心になり、その結果、受身文としては非情物の行為者(原因)が現れている非情・非情受身構文に限られるという。

日本語の固有の受身は有情物主語の文が中心であり、スペイン語の *se* による受身文は非情物主語の文が中心であるという現象の背景原理について、用法拡張の過程を示しつつ丁寧に説明した講演であり、通時的な変化の相を対照言語的に比較するという研究手法に触れることができたという点でも学びの多いものであった。

（文責：幸松英恵）

2021年度 連続講演会「国際日本研究の発展 - 言語・文学・歴史・教育 -」第2回

私の見た文豪たち - 三島・川端・谷崎夫人 -

語り手：Paul McCarthy 氏（日本文学翻訳家・駿河台大学名誉教授）

聞き手：西原大輔（本学）

日時：2021年10月14日（木）17:45 - 19:15 オンライン開催

語り手のポール・マッカーシー氏は、日本文学の翻訳家として知られ、谷崎潤一郎の小説をはじめ、司馬遼太郎『坂の上の雲』の英訳も行っている。また、長く日本に住み、立教大学や駿河台大学で教鞭を執られてきた。この講演会では、若い頃にポール・マッカーシー氏が出会った文学者の思い出が語られた。三島由紀夫・川端康成・谷崎松子・中村光夫などの著名人と直接かかわりをもつ氏の体験談は、大変貴重なものであった。

三島由紀夫の割腹自殺は、世界に衝撃を与えた。ポール・マッカーシー氏は、三島の晩年に、親しく接する機会を得たという。大田区の三島邸に招かれたこともあるとのことである。キリスト教が思想や文化の中核となっている西洋に対し、三島由紀夫は天皇を日本人の精神の中心に据えていた。この考え方を、三島はマッカーシー氏に直接語りかけたとのことである。このほか、川端康成や、谷崎潤一郎夫人の谷崎松子、文芸評論家中村光夫の思い出も紹介された。

昭和30年代から昭和40年代にかけては、日本文学に関心を持つ外国人は、今ほど多くはなかった。日本文学国際化の黎明期だったのである。そのため、三島由紀夫や川端康成のような大家であっても、ポール・マッカーシー氏のような若き日本文学の学究に大変親切だったという。令和の現在、日本を代表する大作家が、一介の留学生をここまで大切にすることは、あまり考えられない。マッカーシー氏も述べておられたように、良い時代に恵まれ、すぐれた作家たちに親炙することができたのだった。

本講演は、しだいに過去のものになりつつある戦後の文壇の一側面が体験に即して語られ、文学の現場を実感することができた、貴重な機会となった。

（文責：西原大輔）

言葉で心を理解する～英語に敬語が無いって本当？～

講演者：車田千種氏（ロチェスター大学）

日時：2021年11月5日（金）17:45 - 19:15 オンライン開催

講演者の車田千種氏は、ロチェスター大学の脳認知学科で言語コミュニケーションの研究に従事している研究者であり、特に言語習得や言語理解の仕組みについて多くの業績を著している。本講演は「コミュニケーションの仕組み」「英語に敬語はあるのか」「理解のための知覚」という3つの話題から組み立てられており、談話論の基本的な知識から始まって最近の研究の動向まで見渡すという贅沢なものであった。

まず「コミュニケーションの仕組み」では、我々が相手の発話内容を字義的な意味で理解するに留まらず、発話における状況的な意味（談話論的な意味）に解釈可能であるのは何故かという課題について、具体例を出しつつ、グライスの協調の原理を紹介した。

次の「英語に敬語はあるのか」はとりわけ多くの聴衆の関心をひくトピックであったと思われる。確かに英語では日本語の「尊敬語」「謙譲語」のように形態論的な方法で敬意を表す表現はなく、それが「英語には敬語がない」と言われる所以である。しかしこの講演では、英語話者が敬意を示すために行なっている言語行為の例が紹介され、発話者が複数の選択肢から表現を選択するという手間や発話の長さなどから聞き手が丁寧さを読み取っているというプロセスにおいては日本語と同じであるという見解が示された。

最後の「理解のための知覚」では、「発話を理解する」とは一体どういうことなのかという課題が提起され、人は相手の発話内容を予測しながら聞いているということは共通見解になっていること、その一方で、状況的な意味や話し手の意図を理解するプロセスも予測的に進んでいるのかについては議論が続いているという現在の研究の状況についての説明がなされた。

この日は、研究者だけではなく大学生や大学以外の一般の聴衆まで、様々な層を対象にした講演であったが、聴衆からの質問も相次ぎ、広く興味を惹く講演内容であったことがうかがわれた。

（文責：幸松英恵）

2021年度 連続講演会「国際日本研究の発展 - 言語・文学・歴史・教育 -」第4回

メトロリンガリズムとアイデンティティ

- ことば、人、場、社会の複合性とアイデンティティを見据えたことばの教育 -

講演者：尾辻恵美氏（シドニー工科大学）

日時：2022年1月7日（金）17：45 - 19：15 オンライン開催

昨今のグローバル化、デジタル・テクノロジーの急激な普及に伴い、異なるタイプの時空間の絡み合いが日常生活の一部となったことで、マルチリンガリズムの限界が唱えられるとともに、新たにメトロリンガリズムの視点が提唱されている。本講演では、メトロリンガリズム研究の第一人者である尾辻恵美氏をお招きし、メトロリンガリズムとは何かを紐解いていただいたうえで、ことばとアイデンティティの関係についての再考、ならびにことばの教育への示唆についてお話しいただいた。

ご講演では多言語化・多文化化している世界・日本の街角で多言語が共存しているデータが紹介されたが、「多」がただの複数のすり合わせではなく、「マルチ」という接頭語では説明できない複雑な活動が行われていることを如実に感じ取れるデータであったことが興味深かった。また、アイデンティティは個人および人間の相互作用の中でのみ生まれるものではなく、人、ことば、場所、モノ、歴史、経済、社会的要素の集合体から生まれるということを丁寧に説明していただき、「ことばと場所」という視点で捉えることの重要性を提起して下さった。さらに、ことばの教育とのつながりについては、教室という学びを提供する場こそが生態的に豊かな環境であることに注目し、グローバル化およびデジタル・テクノロジーに支えられた教室には種々の資源を持つ人が集まっていること、実際にその場で起きていることに注目すること、このような集合体と相互作用により、ことばの学習とアイデンティティの変容が生まれるのだという重要な指摘をうかがうことができた。本講演は、ことばを教えることの意味・意義について、参加者一人一人がこれまでを振り返り、これからを問い直す時間として非常に示唆に富む学びの機会であった。

（文責：石澤徹）

2021年度 連続講演会「国際日本研究の発展 - 言語・文学・歴史・教育 -」第5回

ワークショップ：巨大伝統都市の比較史

- 近世日本とオスマン朝の都市内地域社会をめぐって -

講演者：守田まどか氏（本学アジア・アフリカ言語文化研究所）

ジョン・ポーター（本学）

呉偉華氏（大阪市立大学大学院文学研究科）

小美濃彰氏（本学）

司会：池田真歩氏（北海学園大学）

日時：2022年2月4日（金）15:30 - 18:30 オンライン開催

1980年代から日本近世都市史研究の第三波が本格化し、政治的国家と都市との関係を重視した第二波の研究とは異なり、専門家は都市構造の実態に目を向け始めた。つまり、第三波の研究では、都市住民の個性的な社会的結合に注目しつつ、都市を解剖し、都市社会を構成する諸要素を個別具体的に把握し、さらに都市の全体構造におけるそうした要素の位置付けを解明しようとした。そのさい、近世都市の基本的な社会集団である「町」（=ここでの町は単なる住居表示のための空間分割ではなく、小資本存在である家持町人の身分共同体のこと）、および「町」の存在形態を規定した地域社会構造が分析対象とされた。あたかもパズルを解くように、都市全体の存立を複層的に担保した小社会のありようが一つ一つ明らかにされ、近世都市社会の全貌が把握されようとしている。

本ワークショップでは、その成果を踏まえつつ巨大伝統都市の比較研究を試みた。具体的には、江戸/東京・大坂とイスタンブルの歴史的成熟を内在的に規定した小社会に注目しつつ、比較都市史研究を行う上での方法論的課題や問題点を浮き彫りにした。これらの報告と討論を通して、都市内地域社会論という視点から、世界史的な視野で、日本とオスマン帝国の巨大伝統都市の構造的特質について共同で議論するとともに、皮革史や都市史の方法論について新たな知見を得ることができた。

（文責：ジョン・ポーター）

世界の日本語教育の現場から —今求められる教育・教師—

変わり行く21世紀のグローバル社会の中で、日本語教育も変わってきています。これから日本語教師を目指す人、既に教えていらっしゃる先生方も、皆で新しい時代の日本語教育のあり方、そして教師に求められるものについて、海外に目を向けて考えてみませんか。

12月18日(土) 14:00~17:00 (JST)
オンライン開催 (Zoom使用) / 要申し込み

【話題提供】

- 海外の日本語教育現場で考えた教師の役割
平川俊助氏 (国際交流基金シドニー日本文化センター)
- トルコの高等教育機関における日本語教育
—専門教育・キャリア教育の視点から—
アフメット・ギュルメズ氏 (チャナッカレ・オンセキズマルト大学)
- 世界の現場で「日本語教育」を作る
—リソース・マネジメント・リフレクション—
古川嘉子氏 (国際交流基金マニラ日本文化センター)

【全体討論】

- 指定討論者: 荒川洋平・鈴木智美 (本学)

【ご参加方法】

事前申し込みをお願い致します。

お申し込みをされた方に、前日までに、Zoom情報をお送りします。

お申込みフォーム: <https://forms.gle/Z7bdArEkjnHYuxXc6>

(右側のQRコードもご活用ください)



【お問い合わせ】

東京外国語大学大学院国際日本学研究院 研究活動推進会議2021

TEL042-330-5826 (代), caas_admin@tufs.ac.jp

2021 年度 大学院国際日本学研究院 公開研究会

世界の日本語教育の現場から—今求められる教育・教師—

話題提供：平川俊助氏（国際交流基金シドニー日本文化センター）

アフメット・ギュルメズ氏（チャナッカレ・オンセキズマルト大学）

古川嘉子氏（国際交流基金マニラ日本文化センター）

指定討論：荒川洋平・鈴木智美（本学）

日時：2021 年 12 月 18 日（土）14:00～17:00 オンライン開催

変わりゆく 21 世紀のグローバル社会の中で、今、海外でどのような日本語学習・日本語教育が求められているのかについて、現在実際に従事しておられる先生方からお話を伺うべく、公開研究会を開催した。

平川氏は国際交流基金日本語教育派遣専門家として赴任したドイツ・オーストラリアでの取り組みを紹介し、国・地域・機関によって求められる教師の役割が異なるため、赴任先での日本語教育の意味づけを捉え直し、適応させることが必要だという考えが示された。また、氏自身の中で日本語教育の意味づけの変化を体験されたことを通じて、教師にとって、教育現場の活動を通じて自身の教育観を振り返ることが重要だという指摘もあった。次に、アフメット氏はトルコ人日本語教師の立場から、日本語教育学科があるチャナッカレ・オンセキズマルト大学での日本語教育について事例を挙げながら紹介してくださった。アフメット氏のお話からは日本語母語話者教師もトルコ人教師と求められるものに違いがなく、その地の教育制度をよく理解することが求められていることがわかり、日本語母語話者が現地に赴任するうえで考えるべきことが示されていた。古川氏は、これまでの日本語教育経験及び日本での海外の日本語教師への教師研修や教材開発の経験の中で、教育一般や言語教育の概念的枠組みに触れてきた過程を振り返り、特に海外での日本語教育に関わる関係者にとって「枠組みリテラシー」（カリキュラムなどの枠組みに示された概念を現地の意味付けとともに理解し、学習・教育・評価の具体的な実現形を提示できる資質）を育成することが重要であることが示された。このリテラシーには、ローカル・グローバル両方の観点が不可欠であり、海外で日本語教育に従事する経験そのものが、「枠組みリテラシー」を身に付け、レジリエンスを獲得していくことにつながるということが主張された。荒川氏・鈴木氏による指定討論では、聴衆からの質問もふまえ、海外で日本語を教えるという経験が日本語教師のアイデンティティにいかに関わっているかが垣間見える大変興味深い議論がなされ、実り多い機会となった。

（文責：石澤 徹）

ことば・思考・学び

—日本語教育のこれからに向けて—

【話題提供】

➤ 渡邊雅子氏(名古屋大学)

「論理的思考の社会的構築—思考表現スタイルから考える言葉の教育」

➤ 森岡明美氏(岡山理科大学附属高等学校)

「ことばが思考を深化させる学び—国際バカロレア (IB) の視点から」

➤ 三森ゆりか氏(つくば言語技術教育研究所)

「日本における言葉の教育そのものを見直す

—日本語教育の礎となる国語教育の構築—

【指定討論】 道田泰司氏(琉球大学)

【進行】 石澤 徹(本学)

昨今、「ことばを使って学び、考え、表現するとはどのようなことか」について再検討がなされ、実践の現場でもさまざまな工夫がなされています。ここからさらに教育を改善していくならば、私達はどのようなことを考えるべきでしょうか。本シンポジウムでは、話題提供者から、教師が自分たちをクリティカルに振り返り、さまざまな視点から検討するための材料をお示しいただき、日本語教育のこれからに向けて、考える機会を持ちたいと思います。

2月19日(土)14:00~17:00 (JST)
オンライン開催(zoom)／要申し込み



【お申し込み】

<https://forms.gle/kyiNR7YS5whpjgjT9>

お申し込みをされた方に、前日までに、Zoom情報をお送りします。

【お問い合わせ】

東京外国語大学大学院国際日本学研究院 研究活動推進会議2021

TEL042-330-5826(代), caas_admin@tufs.ac.jp

ことば・思考・学び—日本語教育のこれからに向けて—

話題提供：渡邊雅子氏（名古屋大学）

森岡明美氏（岡山理科大学附属高等学校）

三森ゆりか氏（つくば言語技術教育研究所）

指定討論：道田泰司氏（琉球大学）

日時：2022年2月19日（土）14:00～17:00 オンライン開催

日本語学習の目的・ゴール・学び方の多様化、また、日本語教育従事者の対応範囲の拡大を受け、ことば（日本語）を使って学び、考え、表現するとはどのようなことかについて再検討がなされてきた。そこで、さらに教育を改善していくなれば、どのようなことが求められるかについて、教師が自分たちをクリティカルに振り返り、さまざまな視点から検討するために、日本語教育の隣接領域の専門家の先生方をお招きし、より広い視野・観点からの示唆をいただきたいと考え、シンポジウムを開催した。

渡邊氏、森岡氏、三森氏による話題提供では、思考表現スタイルは社会的に構築されるということ（学習者の母語・母文化に目を向ける）、日本語教育を語学の枠を超えた教育の中に位置づけることの重要性（学習者を全人的に扱い、考える作業を組み込む）、日本語教育の中でももの考え方・表現のしかたを学べるようにするために必要なこと（教師自身の言葉の力を見直す）といった観点が示された。その後、指定討論では、道田氏によって3つの話題を日本語教育領域に引き付けた形で読み解きが行なされるとともに、話題提供者とのやり取りの中で、市民性の観点、各国の教育制度、発問する（問いを立てる）ことの指導のあり方、指導者側が意識すべきことなど、さまざまな角度で議論の深まりが見え、充実した議論が展開された。日本語教育のこれからに向けて、という副題ではあるが、それは、日本語を学ぶ学習者のこれから（未来、将来）にどのようなことばの力、学びが必要となるかを考え直し、丁寧に向き合うことの重要性に改めて気づくことができる機会であり、指導者自身が「当たり前」にしてしまっていたことに目を向ける機会として、気づかされることの多い貴重な機会となった。なお、道田氏のご提案で聴衆にも自由にコメントをしてもらってよいことにしたところ、多くの聴衆がコメントを差し、聴衆それぞれの中でも内省を深め、今後に向けて考えてみる機会になっていたようである。

（文責：石澤徹）